人文学は何語で発信されるべきか

国文学者が英語で論文を書く日

——文学研究の国際化はなぜ必要なのか、どのように可能になるのか？

沼野充義

When Japanese Japanologists begin to write their articles in English: Why is “internationalization” of literary studies necessary and how will it be made possible?

Mitsuyoshi Numano

Currently Japanese humanities scholars are under pressure to use English in teaching and writing irrespective of whether they have sufficient proficiency in it even in cases where there is no absolute necessity to use that language. Given this awkward situation, I would like to address such questions as 1) what are the roles of English and Japanese in the process of “internationalization”? and 2) how will it be possible to create a common platform on which literary scholars specializing in different languages can share their knowledge and experience. Finally, I would like to reconsider the ultimate question: why is it necessary to “internationalize” literary studies and what does it really mean to “internationalize”? In my view, Japanese foreign literature scholars have valid reasons for their use of Japanese when conducting their academic activities; after all, the very process of studying and understanding foreign culture while basing oneself on Japanese language and culture can be a challenging, yet highly positive cross-cultural experience which can bring about fruitful findings and new contributions. English should be actively used as a tool for communication in the international academic community of which Japanese literary scholars should be an integral part.

はじめに

「国際化」の波は人文系にも及び、大学では英語の授業を増やせとか、授業計画を英語でも記載せよ、といった圧力が強くなる一方である。日本文学専門の教員が目を見詰めて英語で日本文化について講義をし、学生たちが聞いてもほとんど理解できない——という不条理な事態も起こっていると聞く。その反面、日本語の位置づけは曖昧で、人文学の世界でも、国文学や国史（日本史）は例外としても、それ以外の分野ではそもそも日本語で学術活動をするものの積極的な意味が見いだしにくくなっている。また国際的な大学・研究者評価のシステムは、もっぱら英語で刊行された業績に基づいており、日本語の業績は殆ど考慮に

入れられていない。

本稿ではこのような現状を踏まえ、主として文学研究に即して、(1) 国際化における英語と日本語の役割、(2) 異なった言語を専門とする文学研究者が専門・国を超えて議論できる共通の土台はどうしたら作れるのか、といった問題を考え、そもそも(3) 文学研究の国際化はなぜ必要なのか、真の国際化とは何か、改めて考えてみたい。

1 国際化とは相変わらず ＜英語化＞のことか？

二、三年ほど前、世界から集まってきた文学研究者のグループに参加して議論していた折、あるテーマについて、欧米のどういう学者にどんな研

究があるといった話題になった。そのとき私が多少は愛国心に駆られて、「それだったら、日本でも素晴らしい本が書かれていますよ」と口をはさんだところ、ハーバード大学の著名な学者に「それは英語で出ていますか？」と聞かれた。「いえ、日本語だけです」と答えたところ、気まずい沈黙が続き、まるで「それじゃ話にならない」とでもいう感じになってしまった。その学者は決して英語中心主義者でもなければ、アジアを見下す偏狭な人でもない。しかし、それでも結局、英語で書かれていなければ、日本人がどんなにいい本を書いても、日本の外の世界では「存在しない」というのが現実なのである。

とはいっても、日本文学についての研究をわざわざ苦勞して英語で書くことにどれほどの意味があるかは、疑問である。アメリカ人の新進気鋭の日本文学研究者、マイケル・エメリックは、英語による『源氏物語』の研究書に“On Writing in English”という序文を添え、どうして自分がこの本を英語で書かなければならないのかについて考察を行っている。従来、英語を母語とする英米の研究者が英語で本を書くとき、このような大前提を疑問に付すことはまったくなかったので、これはとても新鮮である。ここでエメリックはこう言っている（拙訳で引用する）。

この本が具体的にいまのような形を取り始めたのは 2008 年だった。それは『源氏物語』成立のほぼ千周年ということで、世界中で記念行事が行われた年である。自分の研究のあれこれの部分を英語と日本語で専門家や一般の聴衆に聞いてもらったとき、私は『源氏』について語り、『源氏』の研究をすることが持ち得る社会的・政治的な誘発性にいつもよりも敏感にならざるを得なかった。同時に『源氏物語』についてどんな文脈で、どのように語るかがいかに重要であ

るか、身にしみて感ずるようになっていた。つまり、何を言うかだけでなく、それを言うために使う言語もまた重要だということだ。この研究は、部分的には、研究者がこのような歴史的な研究書を英語で、つまり英語によるアカデミックな文脈で構想することを可能にする条件がどのように出現したかの歴史になっているのだ。（Emmerich 2013: 2）

このような言葉を読むと、私たちは自分の研究を何語で書いて何語で発表すべきなのか、ということが必ずしも自明ではないことに気づかされる。しかしその一方で、いまや英語は理科系はもちろん、人文系でも圧倒的に影響力の強い共通語となっている。英語はいまや単に「共通語」というよりは、大きな反響を呼んだ水村美苗の『日本語が亡びるとき 英語の世紀の中で』の用語を借りれば「普遍語」になっていると認識すべきであろう。水村によれば、かつてヨーロッパ全体の普遍語であったフランス語でさえも、最近ではその地位を完全に英語に譲ってしまった（水村 2008: 250-251、および水村 2019）。実際、ヨーロッパの多数の国が参加しているヨーロッパ日本研究協会 European Association for Japanese Studies の大会での発言言語も英語が基本とされている。つまり異なった国からきた日本研究者どうしが議論する際、共通語としては日本語ではなく、英語が使われているのである。

2 モノリンガルな文学研究の世界

一口に人文学といっても分野や主題によって外国語の使用の程度は異なるが、外国文学研究に限って言えば、外国のことを扱うのだから、その性格上「国際的」なものだろうとなんとなく思われがちである。しかし現実には国際性からはほど遠いと言

わざるを得ないことが多い。第一に、自然科学や社会科学とは違って、研究業績がそのまま国際的に通用する研究者はこの分野では稀であり、査読付きの国際的学術誌に常時欧文で研究論文を発表している者はごく一握りの研究者だけであり、主たる業績発表は日本語で行われているのが現状である。言語の壁はこの分野ではまだそれほど大きい。逆説的に響くかもしれないが、国文学研究のほうによほど「国際的」ではないだろうか¹。日本人の国文学者の研究業績はたとえ日本語で書かれていても、優れたものであれば、外国の研究者が努力して日本語で読むべきものとなるからだ。また国文学は外国からの留学生や研究者を世界中から引き付ける可能性を持っているが、外国文学の分野に外国から留学生が来ることは普通はない。

日本における外国文学研究の分野において、卒業論文、修士論文などは、特に英米文学の場合、英語で書くことを義務付けている大学も少なくない。とはいえ、理科系の場合、統計調査があるかどうか不明だが、修士論文・博士論文のレベルでは大半が英語で書かれていると思われるので、それとは非常に対照的である。英米文学以外の外国文学専攻では、それぞれの専攻言語で卒論などを書かせることはずっと少なくなる。

論文は外国語で書かないとしても、外国文学研究の場合、文献を読んだり資料を調査するためには外国語を非常にアクティヴに使わなければならない。その場合、日本の研究界に特徴的なのは、それぞれの専門分野で言語環境が圧倒的に専門言語モノリンガルになっているということだろう。つまりフランス文学の専門家はフランス語さえできればよく、それ以外の外国語の知識はあまり必要ではない。そのモノリンガルな傾向がもっとも顕著なのはやはり国文学（日本文学）であろう。日本において、日本文学の権威となるためには、英語ができなくても問題はない。小西甚一や中西進

のように、英語文献も視野に入れて国文学を世界的な視野から研究しようとする学者は例外的存在だった。

一例を挙げよう。第10回東京大学南原繁記念出版賞を受賞した、宋^{そうかん}吟氏による『平安朝文人論』という博士論文がある。これは9世紀初頭の嵯峨朝時代からほぼ3世紀を視野に入れ、平安朝の「文人」たちの漢文作品の変遷を追いながら、漢文による表現が集団を前提とした公共性から個人の私的表現の領域へと発展していった過程を描き出した大変優れた論文である。私自身もこの論文を高く評価し、選考委員として選評を書いた（沼野2020a）。

ここで注目したいのは、数百点の膨大な書目を集めたこの論文の参考文献表には欧文の批評理論書は一冊も見当たらないということだ。日本語だけで成り立っている学問のディシプリンが、このように日本には厳然と存在しているのである。とはいえ、この論文の潜在的な射程は巨大と言ってもよく、決して狭義の国文学の領域に回収されるべきではない。中国文学の伝播と受容・変容のプロセスは、日本だけでなく、朝鮮半島、ベトナムも含めて広い視野から検討することが可能であり、デイヴィッド・ダムロッシュ（Damrosch 2003）やフランコ・モレッティ（Moretti 2013）が提唱する現代の世界文学論に接合できるはずである。

3 日本で日本語によって外国文学を研究する積極的な意味

それでは、日本において日本語で行われている外国文学研究は、国際的にどの程度意味のあるものだろうか。日本人による英米、フランス、ドイツ文学の研究の水準がいかに高いものであろうと、論文が日本語で書かれていたら、外国の研究者に参照されることはまず期待できない。日本語で書

かれたものは、事実上、国際的には「存在しない」のである。そうだとするならば、日本人が日本語で行っている外国文学研究など、外国の「本場」のものに比べたら二次的なものに過ぎないのだから、世界的な観点から見れば要らないものだ、ということになるのだろうか。

私はその種の悲観論には与しない。二つの積極的な理由がある。

第一に、少数派とはいえ、外国語で研究書や論文を書き、研究対象の本国でも認められている研究者はいるし、これからも努力を続ければ国際的に活躍できる研究者を養成できる。実際、最近は外国で学位を取得し、国際学会で報告を積極的に行う若手も徐々にではあれ増えている。ただし、この分野ではいまだに言語と文化の壁は厚く、理科系などの場合とは違って、外国で認められるとはいっても、お客さん扱いされているに過ぎない場合が多いので、外国でお世辞を言われても真に受けない冷静な自己評価能力を失わないようにしたい。

第二に、日本において日本語を使いながら外国文学を研究・教育するプロセスそのものが大事なのであって、その意義を再認識すべきである。日本育ちの日本人研究者の場合、もしも自分が日本人であることを忘れて外国文化と一体化することが「国際化」だというのであれば、そのような「国際化」を皆でこぞって目指す必要はまったくない。日本語・日本文化の土台の上にありながら、他者としての外国語・外国文化をどこまで理解し、賛嘆や共感だけでなく時には批判的対決も含むような形でどのように異文化間の対話を進められるか、ということこそが、日本の外国文学者が取り組むべき最大の課題ではないだろうか。

他方、日本の国文学界には依然として、外国人の日本文学研究など本格的なものではなく、日本の学界が相手にすべきものではない、と泰然と構

えている研究者もいる。確かに実証的文献研究の面ではそういう面もあるかもしれないが、この考え方は、人文研究者が言語の壁を越えたときに獲得する知的エネルギーを考慮に入れていない。日本語を母語としない外国人が言語の壁を超えて日本文学を研究する、あるいはその逆に日本人が言語の壁をこえてロシア語やドイツ語を習得し、ロシア文学やドイツ文学を研究する——そういった言語の壁を超える人文学の行為を通じて、一つの言語の中に閉じこもっていただけでは発揮できないような大きな知的エネルギーが発生すると私は信じている。この側面を互いに尊重しながら、日本と日本外の人文研究の交流を互いに「対等」な当事者として協力し、発展させるべきであろう。

4 専門・国を超えて議論できる 共通の土台はどうしたら作れるのか？

最後に、文学研究者たちが、専門や国を超えて議論できる共通の国際的な土台をどうしたら作れるのか、という実践的な問題に触れて、この容易には解決策も結論も導くことができない論考の締めくくりとしたい。

文学研究の国際化が求められる背景には、当然のことながら、現代の世界の現実、およびその中で書かれる文学のあり方の根本的な変化がある。それを以下、箇条書きで4点にまとめておく。

- (1) 世界文学の圧倒的な膨大さと多様さ——現代では「世界」が拡張し、ヨーロッパの主要数カ国語が読めればよいという時代は過去のものになった。読まれるべき作品が数十数百の言語で書かれ、膨張する銀河系のように増えている。
- (2) そのような世界の拡張・多様化にともない、流動性も増し、従来のような文学の国別の分類が難しくなった。地理的にも、言語的にも、ジェ

図版1 東京大学図書館前に集合したIWL2018夏期セッションの参加者たち（2018年7月、撮影・五月女颯）

ンダー的にも越境的な作家が増えた。従来の世界文学像が圧倒的に欧米の白人男性作家によって作られてきたのに対して、今ではそうでない新たな世界文学像が作られつつある。

- (3) ポストコロニアルな状況下で、アジア・アフリカなどいわゆる「第三世界」の作家たちも世界文学に参入するようになり、世界文学の脱中

心化が進んだ。

- (4) 世界のグローバル化に伴い、文学作品も（時によく売れる商品として、しかしもっとしばしば、経済的利益をさほど生み出さずとも精神的な価値を伝達するものとして）グローバルに流通するケースが増えてきた。²

このような現代世界の文学の現状があるのに対して、文学研究は従来の一国一言語によるディシプリンの縦割りの限界に突き当たっており、個別ディシプリンを超えた世界文学的アプローチの検討が必要とされている。文学研究における伝統的な国・言語別の縦割り体制（国文、英文、独文、等々）には、「蛸壺」化の危険があることはかねてより指摘されてきたが、縦割りだからこそ専門的研究の深化も可能になり、日本の文学研究全体の水準を

ポストグローバル時代の世界文学と国際研究ネットワークの構築 ―とどまる力と超え行く流れ―

図版2 ポストグローバル時代の新たな文学研究の枠組み

高めてきたことも事実である。しかし、そのような縦割りでは（しかもごく少数の言語別の枠組みでは）、もはや現実には対応できない。世界の現実をふまえ、それに対応した新たな、世界文学研究を視野にいたした研究・教育制度が必要ではないか。

その必要に応える一つの実践的・教育的方法が、ハーバード大学比較文学科教授のデイヴィッド・ダムロッシュが主催するIWL（Institute for World Literature 世界文学研究所）である³。筆者は2018年の夏、東京大学の本郷キャンパスで、このIWLのサマーセッションのホスト役を引き受け、4週間にわたって世界30か国以上から集まってきた130名ほどの若手文学研究者たちと集中的な討論の日々を送った。共通言語は英語である。集まってきた人たちの専門は様々で、アメリカ、西欧だけでなく、東欧や中国からの参加者も多かった（図版1）。このように広く世界の文学への様々なアプローチを議論する場で共通言語となるのは、やはり現状では英語以外にあり得ない。参加者全員がある程度以上の英語コミュニケーション力を持っていれば、これほど便利なものもないだろう。ただし、ここで英語はあくまでもコミュニケーションの道具であって、目的ではないことは強調しておきたい。

ただし、このような試みを通じて、従来の個別言語別・国別の研究ディシプリンを廃止する方向に向かうべきだと言いたいわけではない。あくまでもそれらの伝統的なディシプリンを基盤として、その上にポストグローバル時代の新たな文学研究の枠組みを作るべきではないか、というのが筆者の主張である（図版2を参照）。その際、共通語が英語であるという前提から出発しながらも、多様な言語ディシプリンの共存・相互作用を重視し、日本で行う世界文学論的研究の際には日本語の位置もきちんと確保する必要がある。文学研究その

PROFILE

沼野充義（ぬまの みつよし）

- ・日本学術会議連携会員
- ・名古屋外国語大学副学長
- ・東京大学名誉教授

専門

ロシア・ポーランド文学、現代文芸論

ものが社会的に無用なものとなされる傾向が強まり、実際に学生たちを惹き付けるアクチュアリティを失いつつある現状で、これは文学研究を守るためというよりは、むしろ世界の新たな現実を踏まえて新たに飛躍させるための方法であると考ええる。

注釈

- 1 この点について筆者はかつて『東京大学国際化白書』にその趣旨のことを率直に書いて、白書の編者を驚かせたことがある（沼野2009: 34-35）。
- 2 この点については、沼野（2020b）で既により詳しく論じてあり、ここではそれを繰り返す形になっていることをお断りしておく。
- 3 IWLおよびその2018年の東京大学セッションについて詳しくは沼野（2019）を参照のこと。

参考文献（言語を問わず、著者の姓のローマ字アルファベット順）

- Damrosch, David (2003). *What Is World Literature?* Princeton and Oxford: Princeton University Press. (日本語訳 デイヴィッド・ダムロッシュ『世界文学とは何か?』秋草俊一郎・奥彩子・桐山大介・小松真帆・平塚隼介・山辺弦弘、沼野充義解説、国書刊行会、2011年。)
- Emmerich, Michael (2013). *The Tale of Genji: Translation, Canonization, and World Literature*. New York: Columbia University Press.
- 水村美苗 (2008)『日本語が亡びるとき——英語の世紀の中で』筑摩書房。
- 水村美苗 (2019)「『世界文学』と『日本近代文学』」、澤田直・坂井セシル編『翻訳家たちの挑戦——日仏交流から世界文学へ』水声社、275-284ページ。
- Moretti, Franco (2013). *Distant Reading*. New York: Verso. (邦訳 フランコ・モレッティ『遠読——〈世界文学システム〉への挑戦』秋草俊一郎・今井亮一・落合一樹・高橋知之訳、みすず書房、2016年。)
- 沼野充義 (2009)「日本で研究する外国文学」、東京大学国際連携本部編『東京大学国際化白書（本編）』東京大学、34-35ページ。
- 沼野充義 (2019)「ハーバード大学世界文学研究所（IWL）夏期集中セミナー東京大学セッション実施報告」、「れにくさ」（東京大学現代文芸論研究室論集）第9号、211-228ページ。
- 沼野充義 (2020a)「講評」（第10回東京大学南原繁記念出版賞）、『UP』2020年3月号、58-59ページ。
- 沼野充義 (2020b)「世界（文学）とは何か?——理念、現実、実践、倫理」、沼野充義『徹夜の魂3 世界文学論』作品社、21-40ページ。